

キスは背中に

萌那嘉

俺:志村孝明には、もう十年も一緒にいる友達がいる。
名前は黒崎峰人。通称「ミネ」。
中肉中背で成績は平均ジャスト。何の面白味もない普通の男。
・・・というのは、首から下の話。

「しーくん、おはよう」
「おう、おはよう」
「ねえ聞いてよ、昨日課題にコーヒー零しちゃって・・・乾くの待ってたら夜になっちゃってさあ、寝不足でくまが出来ちゃった」

「ほら」と言ってミネが指差したのは、某デパートの紙袋の縞模様。

「うん、見えないから、それ外してよ」
「ひどいでしょ？もう・・・また保健室の先生に心配されるよ」
「話聞ってる？」

そう。ミネは昔からずっと、紙袋を被っているのだ。
日によってデザインは変わるが、素材は変わらない。
取ろうとすると手が付けられないくらい暴れるから、ミネは水泳の授業を受けたことがない。
卒業アルバムも、紙袋を被った姿で写っている。
クラスの奴らはミネに話しかけはしないが、陰口は叩いている。
でもミネはその陰口すら紙袋に遮られ、聞こえないらしい。

「ミネ」
「なに？」
「その紙袋、さ、取ってよ」
「あ、飛行機雲」
「聞いてよ」

学校に続く坂道を登りながら、ささやかなお願いを口にする。
でもミネはそれすら紙袋に遮られているらしい。青空に引かれた白い飛行機雲を指差している。

「ていうかお前、前見えてるんだ」という突っ込みは、飛行機のエンジン音にかき消された。

校舎について、下駄箱で靴を履きかえる。俺とミネが同じように動くのは、ここまでだ。

「じゃあね、しーくん。また放課後」

「おう、じゃあな」

ばいばい、と手を振るミネが保健室に入って行った。別に体調が悪いわけではない。そこがミネの教室なのだ。

・・・事の起こりは、クラスの全員がミネを気持ち悪がり始めた事だった。

『なんだあいつ』『頭がおかしいんだ』『精神病院に連れて行け』等という陰口が二つ三つ四つと増えていき、担任は

陰口を言っている奴らを叱らずミネを集団の輪から外すことで解決しようとしたのだ。

俺は反対した。ミネは何も悪くないんだから。確かに不気味だけど、でも、別に誰かに迷惑をかけている訳ではないのだから。(好奇心は煽られるけど)

でもミネはそんな時も(多分、笑いながら)「俺なら平気だからそんなに怒らないで」と言った。

ミネは昔から感情の起伏がない奴だった。

「無理に袋を取ろうとすると暴れる」というのと、「とても楽しそうに話す」ということ以外、俺はミネの感情というものを見た事がない。顔が見えないからというわけではない。本当に感情の起伏がない奴なのだ。

(ほんと意味わかんない奴だよな)

まだ静かな教室のドアを開ける。

席はまだガラ空きで、まだ片付けられていないミネの席がどこにあるのか分からなくなった。一番窓際の、一番後ろ。そこが俺の席だった。一番目立たないけれど、一番板書がしにくい席。きっと朝早く来た教師が開けたんであろう、教室の窓から入ってくる冷たい風が水色のカーテンを揺らしている。

「・・・」

特にする事もないから、席に座ってぼんやりと外を見る。

まだ引かれたままの飛行機雲が、印象的だった。

一時限目は、現国。文系の俺には特に考えずとも分かる内容の授業だから、少しまらない。あれから段々と教室に人が来て、気づけばミネの席がはっきり分かるくらいになった。

ミネの席は俺の隣だった。

黒板を見る気にも、教師の話を聞く気にもならず、俺はただぼんやりと窓の外を眺め続けた。

「まだあげ初めし前髪の、林檎のもとに見えしとき・・・」

嗚呼、懐かしい。俺が初めて暗記して、読んでいた詩だ。確かあれは・・・中二の時だ。
ミネに会って、六年目の・・・春の話。

「前にさしたる花櫛の、花ある君とおもひけり」

ずっと外を見ていたら、隣の校舎の屋上に誰かいるのが見えた。

「あっ・・・！」

それはミネだった。
原色の紙袋が、風に揺れている。
おい待て何で、そんなところに・・・

「なんだ志村どうした？」

「ミネ待て・・・ミネ！」

教師のけだるそうな声を無視して、俺は教室を出た。

「何、あいつ」

「ミネって峰人？」

「なんなの一体、キモ」

「てか何であいついつも紙袋被ってんの？」

「噂で聞いたけど・・・あいつの家ってさぁ・・・」

「嗚呼こんな事なら運動部に所属しておけばよかった」なんて思いながら隣の校舎に繋がる廊下を駆け抜け、屋上へ続く階段を一段とばしで駆け上る。

「・・・ミネッ！」

「、しーくん」

「何してんだお前・・・授業は?!」

「それはこっちの台詞でしょ？抜け出してきちゃダメじゃん」

えへへ、と言うミネの紙袋が、揺れる。

肩が、肺が、足が痛い。

「まさか死のうとしたんじゃ・・・」

「だったら、しーくんが休んだ時にするから安心してよ」

「安心できなくなったわ」

しばらくの、沈黙。強く吹き始めた風が、額の汗を冷やしていく。

「ミネ・・・」

「しーくん、僕ね・・・」

「は？それマジ？」

「らしいよ、だから紙袋被ってるんだって」

「え、何、あいつ・・・」

「片目、ないんだ」

「え・・・」

「ちっちゃい時に・・・殴られて潰れちゃったんだ」

ミネは俺に背中を向けたまま、言葉を続けていく。

「お父さんはいつも母さんを殴ってて、母さんそれが原因で出て行っちゃったんだ・・・それからはいつも僕が代わりに殴られてた」

「ミネ・・・」

眼球がない、ただの穴を隠したくて、ミネは紙袋を被り始めたというのだ。

「片目しかないんだったら、片目だけで世界を見つめて生きなきゃならないなら、視界なんていらない」

ミネは幼いながらにそんな事を考えたという。

感情の起伏がないのも、その虚しさからきているのだろう。

「しーくん、僕は苦しいんだ。皆と同じ景色が見えないの・・・怖いんだ」

「ミネ・・・」

「今まで良かったんだ、片目だけでも、袋のせいで暗い視界でも・・・でももう嫌だ」

「しーくんと同じ景色が見てみたくなったんだ」

ミネはそこまで言うと言を閉ざした。

どんなに頑張っても半分しか見られない世界。ミネはそれが不満だという。

でも頑張ってみてきたのだ。

俺の顔も。

空に引かれた白い飛行機雲も。

屋上から見える山々も・・・すべて。

「ミネ、目を閉じたまま前、見てろ」

「?うん」

そのまま静かにミネに近づく。

そっと紙袋に手をかけて、息を呑んだ。

少しずつ、手を上にずらしていく。白いうなじが、痛んだ茶色い髪が、見え始める。

「しー・・・くん？」

「ミネ、目、開けて」

「・・・あ」

ばさっ、と音を立てて紙袋が宙を舞う。

「今のミネには・・・何が見える？」

「・・・しーくん嫌だ袋返して」

「何が見える？」

「・・・しーくんっ！」

「何が見える？」

珍しく声を荒げたミネに動じず淡々とそう繰り返すと、ミネは震える声で答え始めた。

「空」

「あとは？」

「山・・・」

「あとは？」

「飛行機雲・・・」

「色は？」

「青と緑、と・・・白」
「・・・なんだ、見えてるじゃん」
「でも半分だよ・・・」
「・・・いいじゃん、もう半分は俺が見るから」

我ながら寒いことを言った気がして、照れ隠しで言葉を続けた。

「十年間ずっとお前の代わりに全部見てきたんだよ、俺。お前より何倍も明るくて広い視
界で・・・」
「・・・」
「分かんないなら俺に何でも聞いてよ、ミネ」

「文章にでも絵にでもなんにでもしてあげるから」

そういうと、ミネの肩が震えた。

「しーくん・・・僕ずっと、」
「うん」
「しーくんが、好き」
「知ってた」
「顔、よく見えないけどでも・・・好き」
「・・・うん」
「ね、これからも・・・さ

僕の代わりに、全部見てくれる？」
「・・・俺以外、見れる奴いるの？」

泣いているミネの腰に手をまわして、優しく抱きしめる。
肩甲骨に額を押し当てて、俺も涙を流した。
顔をあげて後頭部にキスをして、頬にもと思ったところでミネに止められる。

「顔は嫌だ・・・背中にして」

震える背中に、もう一度額を押し当てて、そのまま優しくキスをした。

「袋、どうすればいいの」
「うーん、ていうかミネさ、片目がないだけなら、眼帯でもよかったのに」
「・・・半分しか見えないの嫌って言ったよね？」
「んー・・・じゃあこれからは眼帯にしよう」

「・・・うん」

「帰りに薬局寄ろうか？」

「・・・うん」

半分か、全部になる。

「ねえ、しーくん」

「何？」

「今日泊まってもいい？」

「いいけど、なんで？」

「観たい映画が、あるんだ」

「いいけど・・・やらしい事込み？」

「・・・なし」

人はその瞬間の喜びを味わいたくて生きているのではないだろうか。

キスは背中に